

平成22年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520072

研究課題名（和文）全体主義と批判理論—フランクフルト学派批判理論の新展開に向けて

研究課題名（英文）Totalitarianism and Critical Theory —Towards a new development of Critical Theory by Frankfurt School

研究代表者

高幣 秀知（TAKAHEI HIDETOMO）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00146995

研究成果の概要(和文)： テクノ・ビューロクラシー／ビューロ・テクノクラシーを通じた社会・文化的再生産過程を批判的に把握することによって、アドルノが論じていた「自然支配」、「同一化批判」といった主題は、「コミュニケーション的行為」（ハーバーマス）、「承認をめぐる闘争」（ホネット）等の問題群へと首尾一貫して接続されるのでなければならない。ここに新しい問題設定の場面が開かれる。

「ヴァイル自伝草稿」の開示、ヘラー教授へのインタビュー等を通じて明らかにされてきたのはまた、ルカーチの思想史的位置の重要性であり、ルカーチとブロッホの決裂の重大性である。例えばジェイなどに依拠するだけの従来の通念は相当程度、書き換えられなければならないであろう。

研究成果の概要（英文）： By the critical conception of the socio-cultural reproduction through techno-bureaucracy/ bureau-technocracy, the theme as “domination over nature”, “criticism of the identification” (Adorno) should be consistently related to the problems about “communicative action” (Habermas), “struggle for recognition” (Honneth). This is a new starting point.

On the field of the history of social thoughts; the disclosure of “the manuscript by Felix Weil” and my interview with Agnes Heller give us important information, which will enable to rewrite the dominating interpretation, for example, by Martin Jay.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：全体主義、批判理論、社会文化的再生産、ビューロクラシー、テクノクラシー

1. 研究開始当初の背景

| 全体主義・ファシズムをめぐるこれまでの膨

大な文献群から、注目されるべき主要な著作を年代順に列記すれば、フロム『自由からの逃走』(1941)における社会心理学的分析、ノイマン『ビヒモス』(1942, 1944)における政治経済学的分析、ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』(1947)における批判理論的分析、アレント『全体主義の起源』(1951)における政治哲学的分析等々、また日本に限定すれば丸山真男『現代政治の思想と行動』(1956)とその後進による政治思想史的研究、また宇野弘蔵とその後継の経済学者達による個別研究などが挙げられる。しかし、それらの研究は、哲学、心理学、政治学、経済学などの各分野へと分立して、全体主義・ファシズムというまさに全体的な思想・運動・体制をトータルに把握するには決して充分ではあり得ていない現状にある — 『啓蒙の弁証法』におけるその萌芽的試行を除いて。

フランクフルト学派「批判理論」については、すでにこの日本においても紹介と研究の歴史は長く、申請者・高幣自身もまた、フランクフルト大学教授であり現在では同大学附属社会研究所所長を務めるアクセル・ホネット教授を、日本学術振興会・日独科学協力事業研究「現代の社会哲学研究 — 技術・社会・文化」によって招聘し、2000年、社会思想史学会をはじめ各地で研究集会が開催されてきた。

第一世代批判理論の原点をなすホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』は、科学技術・デモクラシーの「進歩・発展」にもかかわらず、「何故に人間は、真に人間的な状態に踏み入ってゆくかわりに、新しい類の野蛮状態に陥っていくのか」といった問いを提起していた。しかしながら、こうした事態のトータルな把握と脱却への指針は、決して平明でも容易でもあり得ていない。しかも他方ではまた、さらに新しい類の野蛮、狂気と暴力との連鎖が、マクロ・レヴェルでもミクロのレヴェルでも、なお増殖しているかにみえるのがこの時代であるとすれば、まさにここに、『啓蒙の弁証法』に埋め込まれた概念装置をあらためて精練しなおし、文明化された野蛮と解放への潜勢力とが逆説的に重畳する様相を究明すべく試みるという課題、すなわち本研究課題の主題が成立する。

たしかに、社会・文化の歴史をもいまだ循環し逆行する自然史の水準にあるものとして把握しなければならなかった第一世代の時代経験と、デモクラシー論の積極的展開をつうじてこの時代の諸課題に対処しようとするハーバーマス、ホネット等の理論的方向性とのあいだには、ひとまず相当程度の距離が見出される。しかし、これら両者を背反するものとしてではなく相補的に位置づけていく視座の確立こそが、上記の日独科学協力

事業以来一貫した申請者の課題設定である。

## 2. 研究の目的

全体主義・ファシズムが制覇したかつての時代のフランクフルト学派批判理論の原点として遺された『啓蒙の弁証法』に埋め込まれた根本概念をあきらかにするとともに、対抗理論としてデモクラシー論を主張するだけではなく、ビューロクラシーとテクノクラシーとの相互補完関係に問題軸を設定しながら、顕在的にも潜在的にも進行する新しい類の野蛮と解放への潜勢力とが交錯する事態を、総体的かつ批判的に究明しようとする理論史的研究を目的とする。

## 3. 研究の方法

その際、全体主義体制下の機能的装置をこれまでの諸研究におけるようにビューロクラシーとおさえるだけでなく、テクノロジー・テクノクラシーとビューロクラシーとの特殊な結合形態と把握する論点が焦点をなす。テクノクラシーとビューロクラシーの結合体、すなわちテクノ・ビューロクラシーあるいはビューロ・テクノクラシーこそが、強権の発動と暴力の大規模な行使をもちきめて可能にするのであり、また大衆の規模での同調と共働とを調達するとともに、排除され抹殺される部分を不断に産出する。全体主義とは単なる集団ヒステリーにとどまるものではない、それはそれなりの組織性と技術力の水準を備えてもいるのである。

例えばカナダ、サイモン・フレイザー大学のフィンバーク教授を2005年北海道大学へ招聘することができたが、同教授はハーバーマスが市場における媒体を貨幣、行政における媒体を権力とするのであれば、それらと同じ資格において技術もまた媒体として導入されなければならない、とする。その彼の「合理的技術の成立」への要請がハーバーマス流のコミュニケーション的行為論に合流するのに対して、ハーバーマスへの批判的継承者の位置にたつホネット教授は、ヘーゲル「承認をめぐる闘争」論の再構成を通して、社会的秩序連関とは社会的な権限が非対称的に配分されているそのかぎりにおいては、社会文化的闘争と承認というメディアを通じて行われるコミュニケーション的連関であると理解されるのでなければならない、とする。その彼、ホネット教授がしかし、科学技術・テクノクラシーの問題群へと本格的には立ち入ろうとしていないそのかぎりにおいて、この地点において「テクノ・ビューロクラシーそしてビューロ・テクノクラシーが、社会文化的闘争と承認というメディアを通じたコミュニケーションの連関のうちから

どのようにして形成されて乖離し、またどのようにその連関のうちへと位置づけなおされなければならないか」という新しい問題設定の次元が開かれる。

こうした問題設定においてこそはじめて、『啓蒙の弁証法』においてはその独自の自然概念とともに提出されていながら抽象的な断言にとどまっていた技術・官僚制そして諸科学をめぐる諸問題をこの時代の具体的状況へと接続する回路が開かれるとともに、限定否定という批判概念を具体的に分節化することができるようになる、と考えられる。

テクノロジー・テクノクラシーの問題連関をビューロクラシーへと接続することにより、全体主義の実相に迫るとともに、同時にそのことによって批判理論の新しい展開を期することができる。これが本研究課題計画の核心であり、これによって「全体主義と批判理論」という研究課題を新しい水準において究明し展開することができる、と考える。

#### 4. 研究成果

##### (1)

全体主義が制覇した時代のうちでのアドルノの達成は、自然支配の暴力性の解明と同一性強制の解除への論理であった。戦後に続くハーバーマスの仕事とホネットによる展開は、それぞれコミュニケーション的の行為論と承認論とによって、固有の意味での文化と社会へと問題を転位する、という特性をもつ。こうした経緯の反面は、ハーバーマスなどにおけるテクノロジー・テクノクラシー問題の欠落であり、アドルノなどにおけるデモクラシー・ビューロクラシー問題の脱落である。ビューロクラシーとテクノクラシーとの結合態が新たな全体主義的動向とどのように交錯するのか、ここに批判理論の新展開を期するとき究明されるべき課題の焦点がある。テクノ・ビューロクラシー／ビューロ・テクノクラシーを通じた社会・文化的再生産過程を批判的に把握することによって、アドルノが論じていた「自然支配」、「同一化批判」といった主題は、「コミュニケーション的行為」(ハーバーマス)、「承認をめぐる闘争」(ホネット)等の問題群へと首尾一貫して接続されるのでなければならない。

##### (2)

「ヴァイル自伝草稿」の開示、ヘラー教授へのインタビュー等を通じて明らかにされてきたのはまた、ルカーチの思想史的意味の重要性であり、ルカーチとブロッホの決裂の重大性である。例えばジェイなどに依拠するだけの従来の通念は相当程度、書き変えられなければならないであろう。

前者についていえば、1923年のいわゆる

「第一回マルクス主義研究週間」は、ルカーチの『歴史と階級意識』をメイン・テキストとする研究集会であり、前年1922年、それに先行して予備的な集会がもたれた経緯はある、という事実。後者については、2009年3月駒澤大学で開催された国際シンポジウム「ヘーゲルの体系の見直し」において、招聘されたA.ヘラー教授(ニューヨーク社会研究新学院)からインタビューにおいて重要な証言をひきだすことができた。要点を記せば、ルカーチとアドルノとのあいだに進められた和解への交渉が1968年、ブロッホの介入によって中断された、とのことである。いずれも、これまでの情報・研究の範囲では明らかにされていなかった事実であり、現在の思想史研究において示唆するところが大きい歴史的証言である。

##### (3)

『啓蒙の弁証法』読解への共同作業は、現時点に至るまで計6回、集中的な研究発表・討議をおこなってきた。しかし、その対象が高度に難解なテキストであるため、課題はいまだその達成途上にある。

共同研究のメンバーは高幣のほか、以下の通りである。

細見 和之(大阪府立大学教授)  
上野 成利(神戸大学准教授)  
古賀 徹(九州大学准教授)  
麻生 博之(東京経済大学准教授)  
龍村 あや子(京都市立芸術大学教授)

出版については、確約をいただいている平凡社の担当編集者の過重業務からの解放・復調をまって再始動すべく、共著者一同の研究体制を調整し続けているところである。

##### (4)

ホネット教授の日本招聘については、立命館大学と明治大学の尽力により、2010年3月ひとまず実行されはしたが、そこでの討議はいまだ不十分な水準にとどまっている。同教授の理論を継承する次世代の研究者たちとの交流もふくめて、協同研究体制の展開が必要である。

##### (5)

『批判理論研究』(北海道大学大学院文学研究科哲学講座・高幣研究室編)創刊については、数次にわたる試行を経て、最終版を編集する途上にある。次世代の研究を担うべき研究者たちによる力編が寄稿され、最終的には百数十ページを越える充実した冊子となる見通しである。

参考までに創刊号の目次題目をあげる。

- I 「市場ゲマインシャフト」(ウェーバー『経済と社会』第二部第六章から初訳)
- II “Reification and Thingification: A

Critical Study of A. Honneth's Theory of Reification”

- III 「マルクス労働論とヘーゲル―「真なるもの」と「主体」をめぐって」
- IV 「自然美とはなにか ― アドルノの『美の理論』を通して」
- V 「批判理論の思想史的位置と意味 ― 『啓蒙の弁証法』を照準にして」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

高幣秀知「批判理論の思想史的位置と意味 ―『啓蒙の弁証法』を照準にして」(前篇、後篇)、『批判理論研究、創刊準備号』北海道大学大学院文学研究科哲学講座・高幣研究室編、2007年、1～28頁。査読無(「批判理論研究会」での発表原稿)。

[学会発表] (計1件)

高幣秀知「『ルカーチ弁証法の探究』以後への展望」、北日本哲学研究会、2010年1月10日、東北大学(仙台)。

[図書] (計2件)

高幣秀知、中央公論新社、「金と自由の時代に抗して」、『哲学の歴史、別巻』、2009年、412頁。

高幣秀知、中央公論新社、「西欧マルクス主義・ルカーチ」、『哲学の歴史、第10巻』、2008年、488頁～510頁・705頁～708頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高幣 秀知 (TAKAHEI HIDETOMO)  
北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：00146995

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し